

I Wished On The Moon

月に願いを

Barbara Carroll Trio

バーバラ・キャロル・トリオ

1. バット・ビューティフル

But Beautiful（A.Razaf - D. Redman）（6：12）

2. ジー・ベイビー・エイント・アイ・グッド・トゥ・ユー

Gee Baby Ain't I Good To You（A.Razaf - D. Redman）（6：08）

3. お友達になれないの

Can't We Be Friends（P. James - K. Swift）（5：01）

4. あなたが好き

I've Got A Crush On You（I. Gershwin - G. Gershwin）（4：22）

5. ハウ・アム・アイ・トゥ・ノウ

How Am I To Know?（D. Parker-J. King）（6：43）

6. プレリユード・トゥ・ア・キス

Prelude To A Kiss（D. Ellington）（6：06）

7. いつかどこかで

Where Or When（L. Hart - R. Rodgers）（8：53）

8. 月に願いを

I Wished On The Moon（R. Rainger - D.Parker）（4：31）

9. ユー・アー・ノット・マイ・ファースト・ラブ

You Are Not My First Love（P. Windsor - B. Howard）（6：22）

10. 貴方の家に帰りたい

You'd Be So Nice To Come Home To（C. Porter）（6：36）

バーバラ・キャロル Barbara Carroll（Vocal, piano）

ジェイ・レオンハート Jay Leonhart（bass）

ジョー・コクーゾ Joe Cocuzzo（drums）

録音:2006年3月29、30日 ザ・スタジオ、ニューヨーク

© 2007 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

Produced by Tetsuo Hara & Todd Barkan

Recorded at The Studio in New York on March 29 & 30, 2006

Engineered by Katherine Miller

Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound：

Shuji Kitamura and Tetsuo Hara

Front Cover：Robert W. Richards

Designed by Taz

ラのヴォーカルが聴ける。ビクター・レコーディングのあと、57年にヴァープに2作、64年にキャップとワーナーブラザーズに各1枚吹き込んでいるが、その内のヴァープ盤『ザ・バーバラ・キャロル・トリオ』がアナログ盤で本邦初登場したことがある。

60年代に入ってから家庭中心の生活に移って演奏活動から遠のいてしまったので、バーバラ・キャロルというピアニストはほとんど忘れられた存在になってしまった。しかし彼女は、ピアノ・プレイと縁を切ったわけではなく、72年になると再びニューヨークのクラブ出演などでカムバックする。74年には歌手リタ・クーリッジの伴奏者として来日したが、そのことを知っていたジャズ・ファンは稀だった。そのバーバラが、76年に8年ぶりにトリオ中心のニュー・レコーディングをブルーノートに、80年にはソロ・アルバムをディスクヴァリーノトレンドに行って健在ぶりを示した。ところが、その頃には時代もジャズ・ファンの層や質も変わっていたので、あまり話題にならなかった。バーバラ・キャロルは再び忘れられたような存在になるのか？と思われていた矢先に登場したのが、ヴィーナスの前作『センチメンタル・ムード』であった。聞くところによると、彼女はニューヨークの老舗ホテル「アルゴンキンのオーク・ルーム」や「バードランド」で、いまにもガキッと折れそうな細い腕で達者に演奏しているという。そのプレイを聴いて大いに気に入った原プロデューサーが、あのヴィーナスの第1弾を世に送ったと言うわけだ。余談になるが、原プロデューサ

ーは前作録音中に、彼女の次回作はヴォーカル・アルバムにしよう！と思っていたのでは？と私は推測しているのだが、いかがだろう？

冒頭で述べたように、バーバラ・キャロルのヴォーカル・アルバムを願っていただけに、私にとってこのアルバムはまたとない贈りものとなった。同じ思いの方も少なくないと思う。バーバラの唄はいわゆる弾き語りである。弾き語りと言えば、女性ではシャーリー・ホーンやブロッサム・ディアリーがよく知られているし、ニーナ・シモンやカーメン・マクレエのものも素敵だ。弾き語りの醍醐味は、歌と伴奏（ほとんどの場合、ピアノ・プレイ）が一体になっているところで、すぐれた歌手たちは伴奏と表裏一体になって聴くものを楽しませ、感服させてくれる。さらに優秀な弾き語りの場合は、伴奏＝ピアノ・プレイが一流デザイナーの仕立てた衣装のように、歌にぴったりフィットしているというか、歌と付かず離れずの良好な関係を築き上げて聴く者を魅了する。

ここでバーバラが採りあげている歌は、<ユー・アー・ノット・マイ・ファースト・ラブ>以外、多くの歌手によって唄われ、たくさんのミュージシャンによって演奏されている、あるいは、これからも唄い演奏され続けるに違いない、いわゆるスタンダード・ナンバーと呼ばれる歌曲ばかり。したがって、本アルバムを手に入れるほどのヴォーカル・ファンならよくご存知のもの揃いだと思う。それらについて詳しく触れてしまうと、せっかくの聴く楽しみが半減してしまいそうなので、トラック順に私の感じたことを簡潔に述べるにとどめたい。

バーバラがビリー・ホリデイ・トラディションで唄う<バット・ビューティフル>では、ピアノも語るように演奏される。<ジー・ベイビー・エイント・アイ・グッド・トゥ・ユー>には、レイジーでブルージーな雰囲気が充滿している。語るように演じられる<お友達になれないの>でのバーバラは、唄うことでもプレイすることでも骨太で逞しい。パースから唄う<あなたが好き>でも弾き語りの妙味が満喫できる。リズムの動きに照応してバーバラがゼロニマス・モンク風ユーモアを見せる<ハウ・アム・アイ・トゥ・ノウ>での唄も、捨てがたい風情だ。ちょうど箸休めならぬ《耳休め》に適切な位置に配されている素敵バラード<プレリユード・トゥ・ア・キス>でのバーバラはピアノ・トリオの演奏で唄わない。ラグタイム風、ストライド・ピアノ風のオールド・ファッションド感覚の<いつかどこかで>では、レオンハートのグッド・ベース・ソロも楽しめる。<月に願いを><ユー・アー・ノット・マイ・ファースト・ラブ>は、ともに弾き語りの醍醐味を満喫できる。この2曲と、先に弾き語りを云々したトラック群とをくらべれば、ひとくちに弾き語りと言っても、たとえば明るくとか、切なくとか、というように語り口や趣がさまざまであることがよく解る筈だ。終始軽快なくあなたの家に帰りたい>は、前作『センチメンタル・ムード』でも取り上げているので、そのピアノ・トリオとこのヴォーカル・ヴァージョンを比較してみるのも面白かりょう。これでバーバラ・キャロルの代表作がもう1枚増えたことになる。

久保田 高司

バーバラ・キャロルのヴォーカル・アルバムが出来上がった。ジャズ雑誌のディスク評で彼女の前作『センチメンタル・ムード』を担当した私は、同アルバム中の<フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン>と<アズ・ロング・アズ・アイ・リップ>では“余技などとは言えないバーバラ・キャロルのナイスで本格的なヴォーカルも楽しむことができる。それらを聴いて、彼女の弾き語りアルバムの登場を願う人も少なくはないはずだ。”と述べた。まさか、その希望的発言が本作品誕生のきっかけになったとは思わないが、さすがは原哲夫プロデューサーだ。バーバラのヴォーカル・アルバムを作ってしまった、私にライナーノートを書かないかとの誘いがあって、今これを書いている。

バーバラ・キャロル。「世界ジャズ人名辞典」では1925年生まれということだから80歳を超えていることになる。実際は今年（2006年）78歳らしいが、私の好きな歌舞伎の世界でも彼女と同世代で元気に舞台をつとめている役者はいるし、他の分野でも高齢で現役という方は少なくない。それにしても、バーバラが現役なのは、1950年代からジャズを聴いてきた私には脅威である。私はバーバラという名前の響きに、ひなげしの可憐な花を思い浮かべる。そんなことを言うと、バーバラなどと気安く呼ぶな。いまやジャズ界長老の1人なのだからミス・キャロルと呼ばべ！と叱られそうだが、これからも敬愛の念をこめてバーバラと呼ばせてもらうことにする。

ここまで書いて、気晴らしに外出し、ジャズ関係の書籍をたくさん揃えている書店でバーバラのことに触れたものは？と調べてみたが、見つからない。近くの大型CDショップに寄って彼女のアルバムを探したが、これも皆無。さらに足を伸ばしたマニアックなジャズ・レコード店で、やっとアナログ盤数枚が見つかった。このような現状なので、若い、あるいは新しいジャズ・ファンのために、彼女の来歴などをコンパクトに述べておいたほうがよいのではないだろうか。

マサチューセッツ州ヴォーセスタ生まれのバーバラ・キャロルが、女性初のピ・パップ・ピアニストとして評判になったのは50年代のことだった。最初は女性ばかりのトリオで演奏していたが、47年にニューヨークに進出。ピ・パップのメッカであった52丁目のクラブにチャック・ウェイン(g)、クライド・ロンバルディ(b)と出演して注目されるようになる。そして、52年からの「エンパース」長期出演によって一流アーティストの仲間入りを果たした。翌53年にはブロードウェイで上演されたミュージカル「私とジュリエット」に女優としても出演し、演奏も聴かせたが、そのころから彼女のプレイは洗練されたクラブ・スタイルへと変わっていった。初めてのリーダー吹き込みは、49年のディスクヴァリー・レーベルへのトリオ録音で、そのセッションはサヴォイのオムニバス盤『LOOKIN' FOR A BABY』に収録されている。続く51年のアトランティック吹き込みは『LADIES OF JAZZ』で聴きける。では、バーバラ・キャロルの代表作は？ということになると、やはり53年から56年にかけてビクターに録音された5作、『バーバラ・キャロル・トリオ』『ララバイ・イン・リズム』『ハブ・ユー・メット・ミス・キャロル』『ウイ・ジャスト・クドント・セイ・グッドバイ』『イツ・ア・ワンダフル・ワールド』だろう。これらは90年代末に国内版CDがリリースされた。ついでに言うと、最後のアルバムでバーバ